

公共建築の建設プロセスを
地域学習の機会と捉えた実践活動
—— 富弘美術館を事例として ——

田中 麻里

群馬大学教育実践研究 別刷
第27号 183～188頁 2010

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

公共建築の建設プロセスを 地域学習の機会と捉えた実践活動 —— 富弘美術館を事例として ——

田 中 麻 里

群馬大学教育学部家政教育講座

Workshop on learning regional characteristics through building process of public architecture —— The case of Tomihiro Museum ——

Mari TANAKA

Department of Home Economics, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：公共建築、建設プロセス、地域学習、住教育

Keywords : Public architecture, Building process, Learning regional characteristics,
Living environment education

(2009年10月30日受理)

1. はじめに

昨今、さまざまな地域学習が学校教育に関連して取り組まれ、また地域を学ぶ場として行われている¹⁾。しかし、学校教育において取り組まれている地域学習において、地域の建築プロジェクトや公共建築の建設過程を視点としたものはほとんど見られない。一方、建築分野においても、まちづくり活動は盛んに行われてきた。しかし、公共建築の建設をめぐることは、完成後に住民が建物を積極的に使っていくための活動はみられるものの、それらが建設される地域にまで視野を広げた活動は多くはない。

そこで、本研究では、建築がつくられるプロセスを通して、建築への関心そして、建設される場所、地域へと眼を向け、地域の良さや特徴などを再認識するための地域学習のあり方について考察することを目的とする。地域に住む子どもたちが、住んでいる地域のこ

とを学び再認識する地域学習のあり方について、地域の公共建築プロジェクトを積極的に題材に取り上げた実践事例はまだ少なく、本稿では実践報告を行うとともに課題について検討する。

2. 富弘美術館とその建て替えプロジェクト

群馬県勢多郡東村（現みどり市）に東村立富弘美術館が開館したのは平成3年（1991年）である。昭和61年竹下内閣のふるさと創生事業の交付金を活用して、星野富弘氏（以下、富弘氏と略す）の協力が得られれば富弘氏の詩画を展示する美術館をつくりたいという村の思いによって実現した。東村と富弘氏との間で約束を取り決め、それらを確認して開館した。

1991年に開館したが、年間40万人もの来館者があり、時には入館制限が必要な場合もあった。もともと老人福祉センターを改築して開館したため、老朽化してい

たこともあり、増床して建て替えることが決まった。

建設検討委員会が設立されそのメンバーとして参加することを契機として、美術館の建て替えを機に、東村の将来を担う子どもたちが新美術館や村という身近な生活環境に関心を持てるような活動ができないかと考えた。子どもたちと大学生の交流を通して、互いに東村の歴史や文化を学び、東村の良さを発見し、再認識することを目的とした「子どもたちと新美術館・村づくりを考えるワークショップ」を2000年から開館する2005年まで行った。

3. 建設過程におけるワークショップの実践

建設プロセスのそれぞれの段階で子どもたちが関わりながら、建築そして村という地域について考えることができるワークショップのプログラムを考えた。

第1回 WS「あったらいいな、こんな美術館。あっと驚く美術館」2000年12月6日、13日、20日に実施。いずれも13：30～16：00、参加者子ども15名、大人10名。

建て替えは決まったが、まだ設計者は決まっていな段階では、子どもたちに美術館建設に関心をもってもらうことを目的として行った。

表 建設状況と地域学習ワークショップ

建設・検討状況		ワークショップ
1991年	富弘美術館開館	
1999年2月	東村立富弘美術館将来計画策定委員会発足	
2000年8月	富弘美術館建設検討委員会発足	
2000年10月	設計候補者リストの作成	
2000年12月		第1回子どもたちと新美術館・村づくりを考えるWS「あったらいいなこんな美術館・あっと驚く美術館」
2001年6月	国際設計競技応募要項の検討	
2001年12月	国際設計競技応募作品受付 (～2002年1/5)	
2002年1月	国際設計競技応募作品公開展示 (1/25～2/1)	第2回子どもたちと新美術館・村づくりを考えるWS「子ども審査会」
2002年2月	国際設計競技住民意見交換会 設計競技第1次審査公開、第2次審査公開	国際設計競技住民意見交換会において「子ども審査会」の結果発表と説明
2002年4月	基本設計業務委託契約 (基本設計8ヶ月)	
2002年11月		第3回子どもたちと新美術館・村づくりを考えるWS「AZMARTPROJECT：東村・アート・子どもたち」
2002年12月	実施設計業務委託契約 (実施設計6ヶ月)	
2003年4月	富弘・草木みずとみどり開発ビジョン策定委員会発足	
2003年9月	施工者選定施工計画提案競技（公開）	
2003年10月	本体工事（12ヶ月）	
2004年2月	ラウンドテーブル開始 (美術館建設に関心を寄せる誰もが自由に 参加できる話し合いの場で工期途中から2 週間に1度の割合で開催)	
2004年8月		第4回子どもたちと新美術館・村づくりを考えるWS「親子でラウンド・テーブルに参加しよう」
2004年9月		第5回子どもたちと新美術館・村づくりを考えるWS「とみひろトランプづくり」
2004年10月	現場見学	
2005年4月	新富弘美術館開館	

富弘氏の母校の杣小学校5年生と群馬大学の学生が、「富弘さんもあっと驚くような美術館」について考えて、つくる活動を3回にわたって行った²⁾。

初回はどんな美術館があったらいいか話しあった。2回目は、石や木の実などの材料をもちより、それらを使って各自が詩画や作品をつくった。富弘さんと同じ詩画づくりを行うことで、改めて富弘さんの作品の良さ、そして詩画づくりの難しさを実感した。3回目は、実際に畳サイズの段ボールを用意して、それらを使って子どもたちが入れる段ボール美術館を制作した。初回到話しあったなかから、十二時山美術館と列車美術館を作成した。その中に自分たちでつくった作品を好きな場所に展示した。



写真1 あっと驚く美術館

第2回 WS「子ども審査会」2002年1～2月、あずま小学校4～6年、東中1、2年生

設計者を国際コンペの応募案のなかから選ぶ事が決まり、応募された全1211作品が村の社会体育館に公開展示されることになった。この機会に地元の子どもたちに美術館に興味を持ってもらい、美術館ができると村はどうなるのか、などについて考え、お互いに意見交換することを目的として子ども審査会を行った。

あずま小学校4～6年生と東中学1～2年生が3～5人のグループに分かれて、小学生は20～30作品、中学生は60作品をみて、そのなかから「あったらいいな」と思う案を一つ選定し、その理由を発表する。

グループごとに作品をみながら、こんな建物ができるといいな、子どもでも楽しめる場所がある、この建物は村に合わない、この建物ができるとどうなるか、など自由に意見を出し合っていた³⁾。とくに小学生は、

非常に熱心に作品を見て意見を出し合っていたが、小学生が選んだ作品の中には建築家による第1次審査で選定されたものもあった。

選ばれた作品は「住民意見交換会」の会場に展示し、東中学校の代表者が村民の方々に前に選定の様子や理由を説明し、子どもたちの考えや思いを村民の方々に理解してもらった。「車いすの人でも階段がないから自由に入れる」「広々としていて自然を満喫できる」などさまざまな子どもたちの意見が発表された。「館内の絵の配置や建物の向きなど、子どもの視点に気づかされた点が多い」という村民の意見もみられた。子どもたちの見方や意見の一つ一つに、なるほどそういう見方もあるのか、そういう意見もあるのかと熱心に耳を傾けていた。



写真2 子ども審査会



写真3 住民意見交換会

第3回 WS「AZUMART PROJECT：東村・アート・子どもたち」2002年11月9日

さまざまな人たちとコミュニケーションしながら、多様な考え方や表現方法があることに気づき、新美術館や村についても違った見方ができることを体験しようと実施した。

これは群馬大学教育学部フレンドシップ授業の一貫として行い、美術教育講座の茂木教員、社会科講座の関戸教員と共にいった。アーティストとして、佐藤時啓氏、宮地美奈子氏、鈴木明氏、富弘美術館設計者であるヨコミゾマコト氏を講師に迎えて、ワークショップとシンポジウムを開催した⁴⁾。

鈴木+ヨコミゾ組は、東村の丸い空間、アーチやドームをつくった。ヨコミゾ氏と一緒にシャボン玉と下敷きを使って、丸い部屋がどのように構想されたのか再現した。美術館は丸い部屋ばかりで構成されているが、それは大小さまざまなシャボン玉がひつついた形であることを実体験した。

佐藤組はカメラを通して、宮地組はオブジェづくりとそれらを村に置くことによって、見慣れた村の景色を変換させ、子どもたちはいつもと違う村を体験した。

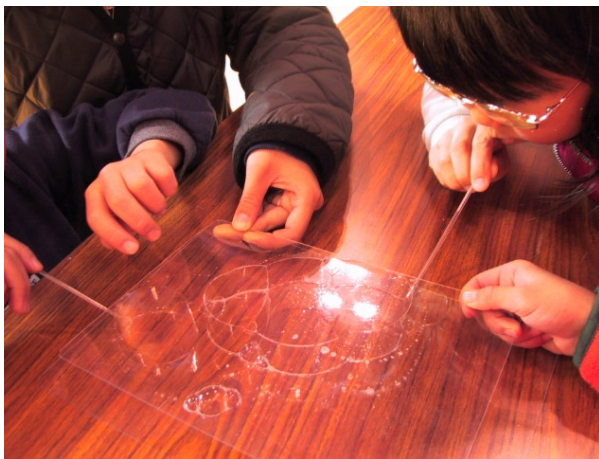


写真4 シャボン玉で美術館を再現

第4回 WS「親子でラウンド・テーブルに参加しよう」2004年8月26日 14：00～16：30、参加者子ども9名、大人13名。

建設工事の進む時期には、誰でも参加できる現場定例会（ラウンドテーブル）へ村民の方々の参加を呼びかけた。ラウンド・テーブルとは、美術館建設に関心を寄せる誰もが自由に参加できる話し合いの場である。夏休み期間を利用して、これまで参加したことが

ない人たちにも参加してもらい、美術館やその建設や運営について、さまざまな人たちが意見を交換し、お互いの理解を深める機会となることを目的とした。

前半は、ラウンド・テーブルについて、そこで話合われたことについての説明や意見交換、そのあと設計者から新美術館についての話を聞き、後半は現場監督所長から話を聞きながら現場を見学した。丸い部屋の中央で音が立体的になったり、丸い壁面を音が伝わったり、新美術館の特徴を意外な方法で体験した⁵⁾。



写真5 ラウンドテーブル現場見学会

第5回 WS「東村・とみひろトランプづくり」2004年9月12日 9：00～15：00、参加者子ども20名、大人35名。

新しい美術館の開館が近づき、美術館に来る人たちに美術館だけでなく詩画の原風景である東村を広く紹介するためのトランプづくりを行い、その制作過程における活動や話し合いを通して、身近な地域の住環境について再認識することを目的とした。

トランプはカルタと違って読み札がないため、低学年の子どもたちも創作でき、また世代や国を超えて遊べるため外国人にも広くアピールできると考えた。

事前に村内の小中学校を通して子どもたちにトランプの図柄になりそうなものについてアンケートを行った(2004年7月12日実施、小学生110人、中学生89人)。それらの集計結果をWS当日に発表した。

場所や建物では渡良瀬川や村内の小学校、美術館などの回答が多く、祭りや行事では草木湖祭り、食べ物では乾燥芋、生き物ではシカなどの回答が多くみられ、結果発表を聞きながら参加者は改めて東村の特徴について再確認した。

結果発表を聞いてから3班に分かれ、スペード班は東村の生き物や行事を、ダイヤ班は東村の場所や建物・特産物をテーマとして、何が東村を代表するものとしてふさわしいのか、また何を世界の人たちに紹介したいか、グループで話しあいながら図柄を選んで描いた。村の何をアピールしたいのか、どこが好きなかなど住んでいる地域について改めて考える機会となった。クローバー班は鈴の鳴る道を散策して風景や草花をスケッチした⁶⁾。

午後には全員で富弘氏の詩画の中からハートの絵柄にするものや表紙デザインを選び、最後にトランプの図柄の説明や感想を発表しあった。

図柄は力作揃いで、ジョーカーは富弘氏の似顔絵である。表紙にデザインされた文字は富弘氏の直筆で、ハートの図柄に使用する詩画についても快く印刷許可をいただいた。当日は村の方々から、ふかし芋の差し入れなどの協力を得た。みんなで作成したトランプは非常にユニークなものとなった。



写真6 トランプスペード班の発表

4. 実践の成果と課題

それぞれの実践において、子どもたちは意欲的に取り組んでいた。富弘美術館については身近なものとして捉えることができるようになっており、地域についても改めて知ること、お互いの意見を確認しあうなかで、地域への愛着を深めることができていた。一度しかない建設プロセスを地域学習の機会として有効に活用できた成果は大きい。

一方で、建設プロセスに合わせた実践はこれ以外にも考案することは可能であった。東村くらの小規模

な学校であれば、美術館での喫茶コーナーのメニューについて、家庭科や総合の時間を活用しながら専門家の支援を得て提案することもできるだろう。また、美術館で販売する土産物グッズを子どもたちが提案することも考えられる。それらが実現できてこそ継続的な取り組みにつながり、地域環境の変化をもたらしていくことにつながると考える。

5. まとめ

東村では新美術館という一つの公共建築をつくるプロセスそれ自体が地域の特性であるにとらえた地域学習を行ってきた。生活環境は変化し自らつくりあげていくものだという考えが充実していくことによって、日本の地域環境も変わっていくと考える。

今回の事例は、有名な富弘美術館だったから地域学習の題材となり得たという意見があるかもしれない。もちろん富弘美術館のもつ力は大きい。しかし、東村に限らず、地域で計画される公民館や公園など、どのようなプロジェクトであっても、地域学習の題材となり得る。あるプロジェクトが計画されたときに、それはなぜ計画されるのか、どういう場所に計画されるのか、その地域にはどのような歴史や文化があったのか、実際に子どもたちで計画案やその一部を考えることを通して、子どもたちが住んでいる地域に関心を持ち、積極的に自分たちのこととして考えていく好機となる。

これまでも身近な住環境の改善を考えるプログラムの実践例は見られた。ぜひ建築プロセスも題材として取り入れられていくことを期待する。

これから教員となる人たちにはぜひ、子どもたちが身近な地域を見つめ直し、地域の特徴を知る、先人の思いや知恵に触れることによって、地域への愛着や誇りを育めるような学びの機会を考案できる力をつけてもらいたいと考えている。そのためには、まず学生自身がそうした地域学習を体験することが必要であると考えており、これからも様々な授業実践に取り組んで行きたい。

本稿は2000年から取り組んで来た一連の実践活動をひとまとめとして、建設プロセスにおける地域学習プログラムの全体像がつかめるように意図したが、個々の実践についての成果と課題、検証も今後の課題とし

たい。

注

- 1) 住宅総合研究財団『「住まい・まち学習」実践報告・論文集 1～10』, 2000年～2009年
- 2) 詳細は住宅総合研究財団「住まい・まち学習 実践報告・論文集」No.2, 2001年
- 3) 『GA』Vol.55, 列島レポート, 2002年を参照。

- 4) 平成14年度フレンドシップ事業アズマート・プロジェクト報告書, 群馬大学コミュニティ学習ワークショップ実行委員会, 2002年
- 5) 「あずま広報」2004年9月号
- 6) このワークショップは夏の鈴の鳴る道を散策する早稲田大学中川研究室と共催で行った。鈴の鳴る道を散策した人たちのスケッチなどをクローバーの図柄とした。「あずま広報」2004年10月号

(たなか まり)